

農業新聞

2019 - 7. 9 (X)

農業で「心」をケア：居場所づくり効果

「農心連携」を掲げる埼玉県白岡市の「ファーム&ガーデン白岡」は、心の不調を訴える人やその家族ら

が年間1500人訪れる。薬剤師、カウンセラー、看護師らがスタッフとして参加。うつ病を患った経験を持つオーナーの吉澤貴世さ

た浩斗君(8)と農園に通う。不登校になってしまった浩斗君について智恵子さんは「養子だからと言われなくて、必要以上に気

日光浴びて作業 不登校も“回復”

ん(57)は「農」を通じ健康を維持してほしい」と活動が続ける。

約1畝の農園ではハーブ、栗、梅、野菜などを栽培する。さいたま市の坂井智恵子さん(46)は、生後1カ月で特別養子縁組をし

た今、学校に行けるようになった。学校に行けるように

埼玉の「ファーム&ガーデン白岡」

なった。智恵子さんは「農園に通い心に余裕が持てるようになり、息子にも笑顔で接することができるようになった」と実感する。

加須市の石川史之さん(29)は、23歳で統合失調症を発症。幻聴や幻覚の症状が現れ、無気力が続いた。2年前から農園に通い、今では医療機器メーカーの事務補助としてデータ入力のアルバイトを週5日こなすまでになった。

農園では幼稚園児の収穫体験、みそ造り講座などのイベントも開く。収穫、除草などの農作業の他に、インターネット交流サイト(SNS)での情報発信やホームページの更新、イベントの受け付けや書類作りなど指摘する。

「自分の存在が周りの役に立っているという自己有用感を得られる体験になる」と指摘する。



さん(奥)の声掛けでジャガイモを掘る浩斗君(手前左)と石川さん(埼玉県白岡市で)